

朝日新聞 2014/3/19

朝を ひらく

永田 円了
真国寺住職



ガツン。大きな衝撃だった。車体は小刻みに揺れながら急ブレーキの圧力に、今にも横転しそうになりながら耐えていた。窓の外には何か黒い破片が飛び散っている。私の身体は、数秒間、死を覚悟の戦闘態勢に入っていた。

数日前の特急「サンダーバード」での踏切事故のことである。警報機、遮断機のある踏切に軽乗用車が突っ込み、あわや大惨事となるところであった。私は偶然、先頭車両に乗り合わせ、事故の衝撃、その後の人の動きをつぶさに見ることができた。

意識の変容

乗客の反応は大きくわけて三つであった。一つは、「何だこれは、一体どうしてくれるのだ」と怒りをもちながらフリーズしている人。二つ目は、早くもスマートフォンを手に、予定の変更を誰かに告げ、JR以外の方法を探し出そうとする人。三つ目は、「ああ、助かった、ありがとう。人生というものは、いつ何が起るかわからない。いつも今を生きなければ」と、意識を深める

人生まさに起承転結

人。

人生はまさに起承転結である。何か事が起る「起」。その出来事をまずは受け入れる「承」。受け入れた後に、想像もしなかったような意識変革が起る「転」。新たな意識をもって行動を始める「結」。起承転結は、何も文章を書くための手法ではない。人が成長し続けるための過程なのである。

もし起承転結の承転が抜けたら、どうなるか。事が起きたこと(起)に対して、ただ条件反射的に感情をあらわにする行動(結)があるのみである。その反応の中には人間的な気遣い、奥ゆかしさ、気づきは存在しない。押されれば押し返すような、短絡的な行動があるのみ

である。

実は出来事そのものには、何の意味もありはしない。何か事が起こったとき、その出来事やどのような意識で受け止めるのか。それを契機にどのような気づきをし、意識の変容を図るのか。この過程のみ、出来事に意味合いが生まれると思う。それはあたかも縦糸(出来事)に対して、どのような横糸(意識)をもって臨むのか。それによって、布地の模様は全て変わってくるのである。

3年前の東日本大震災で、すべての財産を失った印刷会社経営者K氏は、テレビのインタビューに、「ああ、生きてよかった」、津波で全財産は失ったが、何かスッキリした感覚、今まで会社、お金の事はかり考えていた自分におさらばできた、と語った。物語は、承と転の中にある。